づけの発達の2章を担当した。新しい動機づけの発達研究の捨て石的なものになればと考えている。

他には日本生命財団からの援助をうけた「自己成長力」の研究がある。3名の共同研究であるが，能力，性格，体力の自己成長力を想定し，関心，意欲，努力の側面を仮定している。現在までのところ4,000名近くの日本の青少年に質問紙を実施し，自己成長力の発達的変化を検討したこと，また，中国，オーストラリアの青少年のデータも得て比較検討していること，さらに自己成長力を育成する要因として情報的支援と情緒的支援を想定し，先生，父親，母親がどのような支援をしているのかの予備調査を行っていることなどが中心的な研究活動内容である。

研究経過報告

村上　隆

この欄には，またしても1年ご沙汰してしまった。したがって，ここ2年間のことを報告しなければならない。従来のように，研究領域を，「多次元解析」，「心理測定理論」，「日本語能力試験」に3分割して，この間に刊行された物を並べて報告に代えることにしたい。

1．多次元解析

3相データ．多集合データ，多群データという，複数のデータ行列の分析方法の開発を進めてきたが，ようやく次の形で，一応まとめることができた。

村上　隆　1992　階層的主成分分析――複数のデータ行列の同時的分析法　博士学位論文（筑波大学，博士（心理学））

今後は，次の「心理測定理論」との密接な関係をつけていくことが問題となろう。その意味では，次の報告がその出発点になればと思っている。

村上　隆　1992　心理学における個人差の概念と3相データの主成分分析　1991年度科研費総合研究（A）「高度な相互連関をもつ多重配列データの新しい解机システムの開発」報告書，33-45.

2．心理測定理論

筆者自身の考えが，次第に形をなしてきたと思っている。

村上　隆　1992　テストはどこまで信用できるか―テストの理論と測定誤差―　金子隆芳（編）『最新心理学トピックス』教育出版　256-263.

村上　隆　1993　個人差の測定とその意味　原岡一馬（編）『人間の社会的形成と変容』ナカニシヤ出版　246-256.

村上　隆　1993　家族的類似の概要にもとづくテスト得点のモデル　名古屋大学教育学部紀要―教育心理学科―，40.（本紀要）

第一のものは，テストの信頼性に関する全くの啓蒙的記述，第二と第三は，最近検討している「家族的類似」モデルに関するものである。

3．日本語能力試験

従来通り，大坪一夫（東北大），野口裕之（当教室）両氏とともに，「日本語能力試験」の報告書（平成3年度刊行分より公開）の執筆を毎年行ってきた。それ以外には，公刊された成果はないが，私にとっては重要なフィールドであり，今後も精力を傾けたい。

4．その他

入試研究を，もっと広く青年期における発達の問題としてとらえるような展望を求めていきたい。教育評価，教育心理学におけるデータ解析の問題については，今後も発言を続けたい。

村上　隆　1992　敬語規範のモデル論　田島毓堂（編）『日本語論究1―言語学とその周辺』和泉書院　169-192.

村上　隆・石田裕久　1992　高校生の意識を通して見た高校入試制度　杉江修治・三上和夫（編）広島県高等学校教職員組合教育研究所『だれのための高校』合同出版　156-211.

村上　隆　1992　入試データの分析　平成3年度教育研究特別経費プロジェクト研究報告書「入学試験の妥当性と教育プログラムの改善に関する研究」名古屋大学教育学部，53-80.

村上　隆　1993　名古屋大学における前期日程入学者と後期日程入学者の比較　1992年度科学研究費総合研究（A）「大学入学者の犠牲と選抜方法との関連についての追跡調査研究」報告書，169-173.

村上　隆　1993　学習の評価・個人差とその測定　原岡一馬（編著）『教育心理学』日本放送出版　128-136, 137-147.

村上　隆　1993　情報処理教育センターとのお付き合いこれから　名古屋大学情報処理教育センター広報，№25，8-12.

研　究　経　過　報　告

池　田　豊　應

1．登校拒否研究

昨年の本紀要で報告した登校拒否生徒のための「ヨコ体験グループ合宿」の試みは，今年も昨年と同様，三月末に旭高原で行われた。その後も同じグループで定例会や合宿が継続され，スタッフだけの研究会も続けられているが，やはり二年間の積み重ねというものは重く，この間の生徒たちの変化，成長には非常に大きなものがあった。その内容は本紀要には報告できなかったが，一部は本年五月の東海心理学会において発表した。

本学部の「中等教育研究」第4号には，その「中等教育改革の課題：世界と日本」という特集に合わせて，「池田豊應　1993　登校拒否論から見た現代の精神的状況　―タテとヨコの社会学―」と題する論文を書いた。

また，スタッフの参加経験についての検討は，名古屋大学教育方法等改善経費研究報告書に載せられた（池田豊應　1993　臨床的教育・訓練の方法としてのグループ・アプローチ　―登校拒否グループ活動へのスタッフ参加経験から―　名古屋大学教育学部）。

昨年，刊行予定として報告した「青年期登校拒否，ヨコの広がりをめざして」は，まだ日の目を見ることができていない。原稿の量が非常に多くなりすぎたので，もう一度，スリムに減量させねばならなかったためである。大体，その作業を終えたところであり，今度こそは大丈夫と思ってはいるが，経過報告とはいえ予告をあまり早まっては格好が悪いと大いに反省させられている。

2．青年期危機研究

本来は上に述べた編著書の一部であったが，そこに入りきらないために独立した論文として本紀要に載せたのが「青年期危機における“現存在実現”の空間性　―タテとヨコの現象学―」である。これはずっと前々から関心のあったテーマであり，よく口にしている事柄であったが，あらためて文章化でき幸いであった。

このテーマに関する本来の総合的まとめを行わなければならないが，まだ少々の時間を必要としている。

3．ロールシャッハ研究

ロールシャッハ法に関する研究は，あいついで次の二つがまとめられた。

高橋昇報告・池田豊應コメント　1993　「華やかなシニフィアンに遊ぶ少女」の事例　岡堂哲男編　こころの科学増刊　心理テスト入門　日本評論社

池田豊應　印刷中　神経症者のロールシャッハ反応　岡堂哲男編　現代のエスプリ別冊　精神病理の探究　至文堂

4．現象学研究

「人間性心理学研究」の特集「現象学と心理学」の編集を村本紹司氏と共同で担当して，私自身は次の論文を書いた。

池田豊應　1993（本年12月刊行予定）現象学と心理臨床　人間性心理学研究　第11巻第2号

5．その他

1，2とも関連して新しい学校づくりの動きに関与し，いろいろと考えさせられることが多いが，その一端は，上と同じく今年の東海心理学会で発表した。

（平成5年11月12日）